

氏名（本籍）	はた くみこ 畑 久美子（神奈川県）
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	博甲第 40 号
学位授与年月日	令和 6 年 3 月 15 日
学位授与の要件	共立女子大学大学院学則第 41 条第 1 項該当
論文題目	明治期における染織品デザイン教育と日英交流
論文審査委員	（主査）教授 長崎 巖 教授 丸田 直美 教授 宮武 恵子 教授 熊谷 仁 教授 小原 敏郎

### 論文内容の要旨

本研究では、近代化の過程において染織品デザイン教育が変容しながら形成されていく様相を明らかにした。特に、以下の 2 つの視点を中心に検討した。1 点目は、イギリスと日本では形成過程に差異があるのか、2 点目は、日英交流が染織デザイン教育の近代化にどのように関与しているのかである。

はじめに用語の整理を行い、近代におけるデザイン概念について明らかにした。当時の辞書類や雑誌を資料に検討した結果、イギリスにおいて design は、模様や配色を考案し図案や意匠図を制作することであり、それらは用途に応じて行われていたことが分かった。design の語は、幕末頃に日本で認知され、訳語として雛形、意匠、図案など様々な日本語が選択された。訳語は時代が下がるにつれ追加されていった。万博参加や留学などの日英交流により、デザインに関する知見が増えるにつれ、design の概念が更新、または再認識されたことによって訳語が増えていったものと考察した。大正期以降は外来語として扱われ、カタカナ表記の「デザイン」が一般的になり、明治期までに付与された design の訳語はそのまま「デザイン」の意味として引き継がれた。

次に、イギリスと日本の染織品デザイン教育の形成過程を検討し明らかにした。近代初期のイギリスでは、染織品の下絵は旧来の様式か、フランスからの輸入や模倣であったが、次第にフランスなど周辺国の生産技術が向上してくると、競争に勝つためにイギリス独自のパターンによる機械生産を奨励することになった。当初は職工に純粋美術教育を行ったが、その方法では製品の美的品質を向上させるには至らず、19 世紀中頃から絵画教育からの脱皮が図られ、素材、配色、模様の配置、用途、などの考慮を伴った装飾デザイン教育へと移行した。

日本では、明治初め頃から徐々にデザイン教育の萌芽が現れ、明治中頃から専門教育が開始された。美術を軸とした形状や表面装飾中心のデザインは図案と呼ばれ、工業を軸と

し構造計画中心のデザインは意匠と呼ばれていたと結論付けた。明治期から機械製造に移行した工程については、機械の扱い方や新しい工程を教育することになり意匠教育が行われ、一方、輸出目的の製造が増加したことにより、西洋的な模様や西洋向けの用途を考慮した図案教育が行われたものと考察した。そして、戦後にはどちらもデザイン教育と呼ばれるようになっていった。

次に、日英交流による日本のデザイン教育形成への影響について考察した。幕末から明治期の渡英者の報告書や日記などを資料に、イギリスにおける訪問先を調査した結果、渡欧した者たちの多くがサウス・ケンジントン博物館と附設のデザイン学校を見学していたことが分かった。このことが、明治の早い時期から博物館やデザイン教育の学校設立に至った一因となったと考察した。また、当時のイギリス側の関係者は、ヘンリー・コールを中心とした者たちで、中でも日本との掛け橋となった人物はクリストファー・ドレッサーであった。ドレッサーは明治9年の来日以前に、イギリスにおいても日本人や日本の文化との交流があったことを明らかにした。

イギリスは世界に先駆けて産業革命を経験し、技術革新が先行して自生的にデザイン教育が形成されていったが、日本では、開国や明治維新などを機に技術革新と並行して、輸出や万博出品に向けたデザイン教育の必要性に迫られていった。産業先進国であったイギリスと、西洋に後行した日本の、染織品のデザイン教育形成過程は、開始時期には差があるが、同様の轍を歩んだと考えられた。旧来の教育に新しい要素を取り入れる場合に、単にその要素を組み入れても目的を達成することは難しいことが分かった。近代の日英交流は、日本が開国して近代化を目指している時期とイギリスがデザイン改革を推進していた時期に行われた。日本はイギリスから最新の工学知識・技術、博覧会や博物館、デザイン学校などの産業と芸術を融合させるしくみを楽しんだ。一方、イギリスは、日本の伝統的な工芸の精緻や独特な美を楽しみ、デザインの一手法として取り入れ、日英双方向の流れがあったことを明らかにした。

#### 論文の審査結果の要旨

近代デザイン史研究において「デザイン教育」の重要性については多くの研究者が言及しているが、「デザイン教育」そのものを主題にした研究はまだ少ない。また、その中でも、染織品については重要な製品の一つであったことが度々論じられているが、断片的な研究にとどまっている。本研究は、近代デザイン史の特に初期段階において、産業先進国であったイギリスと後行した日本を対象にして、染織品のデザインを視座に、両国における「デザイン教育」形成過程と推移をあきらかにし、近代デザイン史におけるデザイン教育の位置付けを試みることを目的とするものである。

序章に続く第2章では、近代におけるデザイン教育の「デザイン」とは具体的には何を指すのかということ定義したうえで、日本語のカタカナ「デザイン」は英語 design からの外来語であるが、design の語は当時のイギリスではどのような概念で用いられていたの

か、そして日本に持ち込まれ、明治期において「デザイン」の語にはどのような意味が付与されたのか、という課題について考察している。その結果、日本においては、幕末以降、英語 design の訳語として雛形、意匠、図案など様々な語が選択され、時代が下がるにつれ追加されてきたことを明らかにした。

第3章では、18～19世紀のイギリスにおいてデザイン教育を行っていた、ソサエティ・オブ・アーツ、アカデミー、官立デザイン学校という中心的な3つの教育機関の変遷を辿り、デザイン教育の形成過程を考察するとともに、それらの機関における染織デザイン教育の実施状況を検討している。

第4章では、幕末から明治中頃にかけて、すなわち日本近代化の黎明期に焦点を当て、近代化の過程において染織品のデザイン教育が萌芽期を経て形成されていく様相を考察し、近代日本の染織分野教育の一側面を明らかにした。特に幕末から明治中頃にかけての日本近代化の黎明期に焦点を当て、学校教育課程に染織品デザイン教育が組み込まれるまでの過程を詳細に検討している。

第5章では、近代においてデザインの分野ではどのような日英交流がもたれ、交流によって何が流入し流出したのかを考察している。日本のデザイン教育導入過程における日英交流で重要な位置にあったのは、ヘンリー・コールを中心としたサウス・ケンジントングループであり、中でも日本との掛け橋となったキーパーソンはクリストファー・ドレッサーであった。ドレッサーが日英交流に果たした役割についてはこれまでも指摘されていたが、ドレッサーが明治9年の来日以前に、イギリスにおいても日本人や日本の文化との交流があり、日本への関心が十分に高まったところで来日していたことを新たに見出した。また、近代の日英交流は、日本が開国して近代化を目指している時期とイギリスがデザイン改革を推進していた時期に行われたこと。日本はイギリスから最新の工学知識・技術、博覧会や博物館、デザイン学校などの産業と芸術を融合させるしくみを享受したこと。一方イギリスは、日本の伝統的な工芸の精緻や独特な美を享受し、デザインの一手法として取り入れたことを明らかにした。

本研究は、近代日本の始点となった明治時代と同時期のイギリスのデザイン教育に着目して、両国間の交流が日本のデザイン教育にどのような影響を与えたのかを詳細に明らかにしたものである。近代染織史服飾史の研究においてほとんど触れられることなかったデザイン教育という視点からの近代文化史的視点を持った画期的な研究であり、また近代史研究に対しても大いに貢献する重要な研究であるといえる。最終試験にも合格しており、審査員一同は、博士（学術）の学位論文として価値あるものと認める。